

「甌諺略」の筆者について

村 上 之 伸

1 はじめに

清末の文字改革者、陳虬（1851-1904）は自分が考案した切音文字「甌文」を普及するため、1903年に浙江瑞安方言で分類された字彙『甌文音彙』（以後『音彙』）とテキスト『新字甌文七音鐸』（以後『七音鐸』）を出版した。本稿で扱う「甌諺略」はこの『七音鐸』の巻末に附されている方言語彙集で、『七音鐸』を一度刊行した後、新たに追加されたものである。

例言では増補した理由について以下のように述べている。

甌諺略は刊行后所増本，不僅為甌方言而作，中多向來有音無字之字，且多仄聲。其音原為別地所有，其字實為舊文所無，每日倒切數句，足補前課平聲倒切之缺，故附増于末。

即ち、『七音鐸』では平聲の漢字を用いて「甌文」を学習するが、「甌諺略」には漢字で表せないような方言口語語彙が多く、仄聲韻も含まれているので、「甌文」を書く練習をするのに必要であると考えたのである。

収録語数は168語で、それらが天文、歳時、時令、地理、人倫、人物、身体、器具、珍宝、数目、権度、疫病、禽獸、獸畜、蔬菜、鱗介、飯饌、薪柴、散語、応酬の20のグループに意味分類されている。各語は「甌文」によって表記され、その右側に音節ごとに反切字或いは直音字が書かれ、下方にはその語の意味が割書きで示されている。

「甌文」の読み方は拙稿（2004）による『音彙』の分析で明らかになっているが、実際にその字音を「甌諺略」の「甌文」に当てはめてみると、音韻的に一致しない箇所や文字の表記方法の異なる箇所が多く存在しているのがわかる。本稿ではこの点に着目する。そして「甌諺略」の筆者について考察する。

2 「甌諺略」の聲母と韻母

『音彙』における聲母と韻母を以下にまとめる。漢字は反切字を表す。

聲母

(巴) p	(拋) p'	(拔) b	(襪) m	(髮) f	(伐) v
(打) t	(撻) t'	(踏) d	(捺) n	(臘) l	
(咤 / 紫) ts	(插 / 此) ts'	(暫 / 慈) dz	(史) s	(似) z	
(腳) tɕ	(卻) tɕ'	(噉) dz	(捏) ɲ	(虛) ɕ	
(葛) k	(渴) k'	(廠) ŋ	(霍) h	(葉) fi	(央) ?

韻母

(醫) i	(醫) i/?	(阿) u/?	(於) y/?
(鶯) a/?	(鴉 / 鶯) ia/?	(娃) ua/?	
(汪) o/?	(汪) io/?	(窩) uo/?	
(猶) ɔ/?	(約 / 猶) io/?	(灣) uo/?	
(安) ø/?		(淵) yø/?	
(諳) e/?	(煙) ie/?		
(慶) ɛ	(央) ie		
(哀) ai	(挨) iai/?	(隅) uai	
(甌) au	(甌) iau		
(育) əu/?			
(阿) iu/?			
(因) aŋ	(因) iaŋ	(溫) uaŋ	
(膺) eŋ	(膺) ieŋ		
(恩) əŋ			
(氫) yŋ			
(翁) oŋ	(翁) ioŋ		

「甌諺略」に収録されている語彙数が少ないので、そこで使われている聲母や韻母の数を『音彙』と直接比べることはできないが、「甌諺略」には『音彙』に現れない聲母や韻母があるので、ここではそれらについて述べる。

まず聲母についてみると、『音彙』にはない g 聲母が存在する。以下にその全てを示す。括弧内の数字は「甌諺略」につけた通し番号で、音節末数字は聲

調（奇数陰調、偶数陽調）を表す。

- (15) go8 di2（攔隄）塗邊放水處也
- (94) gu4 ku1（☐鳩）鵲姑也
- (95) ga2 ga2（嘎嘎）鴨也
- (110) go8 ba8 tsu7（☐白粥）作稀飯也
- (121) gi2（☐）其也
- (132) mi1 go2（滅☐）滅也

鄭張尚芳（1964）が「g 母在“讀”音系統中沒有什麼地位，只有“唧厚跪”等少數幾個讀音“話音化”的字是讀 g- 的，而在“話”音系統裏，這卻是個常用的聲母」と述べているように、g 聲母は話し言葉のみで常用される聲母である。中には漢字で書けないものも多い。字彙という性格上、『音彙』にこのような口語語彙が収められていないのは当然であろう。

韻母では、『音彙』にはない音節子音 ɲ が存在する。「甌諺略」では「二、児、汚」がこの音で読まれ、頭子音が付かないことで共通している。例えば：

- (32) na4 ɲ2（奶兒）女也
- (42) la6 ɲ7（拉汚）小兒大便也
- (55) sai3 zyø2 ɲ2（瑣船兒）小舟也
- (67) ɲ6（二）數目也

『音彙』の各韻には、韻母を表す「甌文」が必ず陰陽の二種類あり、それらは単独でゼロ聲母と fi 聲母の音節を表すのであるが、ɲ 韻は頭子音が付かず、『音彙』において韻のグループを作ることができない。以下のように「一」から「十」の数字のうち、「二」の字音だけが現れないのも書き忘れたわけではないのである。

『音彙』における数字の読音

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
iai7/ia7	無	so1	si5	ɲu4	ləu8	ts'a7	puo7	tɕiau3	za8

3 「甌諺略」における「甌文」の表記

「甌諺略」の「甌文」には韻母の省略とも思えるような表記が存在する。これらが単なる書き忘れでないことは、漢字表記に必ず直音字（大部分は本字）が用いられていることから推測できる。興味深いのはこの直音字が反切上字の聲母、韻母と同じになることである。反切上字の音は以下ようになる。

巴 puo	拋 p'ɔ	拔 bo	襪 mo	髮 fo	伐 vo
				媽 muo (陰調用)	
打 ta	撻 t'ɔ	踏 do	捺 no	臘 lo	
咤 / 紫 tsɿ	插 / 此 ts'ɿ	暫 / 慈 dzɿ		史 sɿ	似 zɿ
腳 tɕio	卻 tɕ'io	噓 dzio	捏 nio	虛 ɕy	
葛 kɐ	渴 k'ɐ	卸 go	巖 ɲo	霍 ho	

このうち、ts 系聲母にみられる韻母 ɿ の省略は『音彙』にも存在する。例えば：

ts : 知芝姿 ts' : 恥雌次 dz : 馳持雉 s : 詩史私 z : 時事字

この省略は一種の音韻処理である。即ち、韻母 ɿ と同じ第 14 部に属する韻母 i と文字の上で区別することで、ts 系聲母における韻母 i と韻母 ɿ の対立を学習者に理解させようとしたのである。

また tɕ 系聲母では虚 ɕy の省略が『音彙』にみられる。例えば：

ɕ : 虚許揮諱

これも音韻的な問題である。「虚」が属する『音彙』第 3 部 y 韻は現代瑞安方言では y 韻と əy 韻の二つの韻に分かれるが、当時の ts 系と tɕ 系の対立を残しているのは s と ɕ のみで、その他の聲母は tɕ 系に合流している。

『音彙』 y 韻				
	ts 系		tɕ 系	
	s	ts/ts'/dz	ɕ	tɕ/tɕ'/dz
y	無	tɕ/tɕ'/dz	ɕ	tɕ/tɕ'/dz
əy	s	無	無	無

『音彙』の時代に sy と ɕy ではなく、səy と ɕy という音声的対立であってもおかしくない。韻母部分がないのはこの対立を文字上で表し、学習者にこの韻母

の違いを理解させたかったからではないか。本来ならば、史 s の方を省略すべきであるが、既に韻母 i で省略されているので、虚 ɕ の韻母を省略した。tɕ 系聲母の反切上字の中、虚 ɕ だけが入声韻 io でないのは、この音韻的問題を解決するのに反切字を替えたためだと考えられる。

「甌諺略」にはこの他にも『音彙』にはない、韻母部分の省略と思える表記が存在する。以下にその全てを挙げる。

(22) 彼處也 ba2 ta1 □□

第二音節は聲調が平調であることと聲母が t であることだけがわかる。音として「打」の字が当てられているところから、韻母を -a とした。温州「旁單 buo2 ta1」那裏（『温州方言詞典』（以下『詞典』）191 頁）。

(24) 云何處也 niau8 bo2 di6 □月地

第二音節は聲調が平調であることと聲母が b であることだけがわかる。音として「月」の字が当てられているところから、韻母を -o とした。「月 bo2」量詞。用於呈平面的事物（『詞典』81 頁）。

(29) 父也 a7 do6 阿□

第二音節は聲調が去声であることと聲母が d であることがわかるだけであるが、音として第 21 部の「彈」が当てられているので、韻母を -o とした。温州、永嘉では“父親”を「阿大 a7 da6」（「大」は文読）という（『浙南甌語』（以下『甌語』）129 頁）。

(39) 女僕之稍老者 a7 muo1 ɲ2 阿媽兒

第二音節の「甌文」には聲母のみが記載されている。『音彙』には存在しない文字で、『七音鐸』第六課には「音媽、芒字清聲。」とあり、「襪」の陰調字として扱われている。瑞安「媽 mo1」。温州「阿姥 a7 mo1」年紀大的女僕（『詞典』126 頁）。

(43) 小兒剃頭也 ta3 ko1 ko1 打光光

第一音節は聲母が t であることがわかるだけであるが、音として「打」の字が当てられているので、ta3 とした。温州 tie3 kuo1 kuo1 指嬰兒滿月時，剃去除凶門處的全部胎髮（『詞典』138 頁）。

(46) 結髮也 ta3 bie4 ɲ2 打辮兒

第一音節は聲母が t であることがわかるだけであるが、音として「打」の字が当てられているので、ta3 とした。温州 tie3 bi4 ɲ2 梳辮子（『詞典』135 頁）。

(47) 指彈額也 ta3 poŋ1 打紉

第一音節は聲母が t であることがわかるだけであるが、音として「打」の字が当てられているので、ta3 とした。温州と意味が異なる。「打𪗇 tie3 poŋ1」
親嘴；接吻（『詞典』140 頁）。

(51) 小兒快走也 kə3 da6 ŋ2 趕口兒

第一音節は聲母が k であることと声調が陰上であることがわかる。音として「趕」が当てられているので、kə3 とした。温州 ky3 da6 ŋ2 一種少兒遊戲活動，以追逐抓人爲內容（『詞典』33 頁）。

(73) 數目也 puo7 八

聲母が p であることと入声であることがわかるだけであるが、音として「八」が当てられているので、『音彙』をみて puo7 とした。

(78) 數目也 vɔ6 萬

聲母が v であることと去調であることがわかるだけであるが、「萬」が当てられているだけであるので、『音彙』をみて vɔ6 とした。蒼南、平陽：vɔ6。

(89) 瘡也 ta3 dzyə2 打潮

第一音節は聲母が t であることがわかるだけであるが、音として「打」が当てられているので、ta3 とした。温州 tie3 dzie2 瘡疾（『詞典』137 頁）。

(100) 虎也 du6 mo2 大貓

第二音節は聲母が m であることと平調であることがわかるだけであるが、音として「蠻」が当てられているので、その音 mo2 を記す。温州 dru6 muo2 虎（『詞典』285 頁）。

(108) 吃飯也 py1 vɔ6 鋪飯

第二音節は聲母が v であることと去調であることがわかるだけであるが、「飯」が当てられているだけであるので、『音彙』をみて vɔ6 とした。蒼南、平陽：vɔ6。温州「鋪 pəy1」撥食（『詞典』300 頁）。

(114) 旱稻稈也 bi2 de4 kə3 肥稻稈

第三音節は聲母が k であることと上声であることがわかるだけであるが、音として「稈」が当てられているので、その音 kə3 を記す。温州「肥稻稈 bei2 de4 ky3」旱稻的稻草（『詞典』253 頁）。

(132) 減也 mi1 go2 減口

第二音節は聲母が g であることがわかるだけである。音として「卸」が当てられているので go2 とした。

(135) 何事也 ɲie2 si5 kə5 口事幹

第三音節は聲母が k であることと去聲であることがわかるだけであるが、音

として「稗」が当てられているので、その音 kə を記す。「什麼 ɲie2」（『韻語』132 頁）。

(138) 無法也 ɲ2 fə7 唔法

第二音節は聲母が f であることがわかるだけであるが、「法」があてられているので、『音彙』をみて fə7 とした。

(146) p'ə5 dzo2 泡茶

第一音節の「甌文」は子音 (p') のみであるが、「泡」があてられているので、『音彙』をみて p'ə5 とした。

(166) ts'ej3 bie6 və6 請便飯

「飯」の「甌文」には韻母の記載がないが、「飯」という字があてられているので、『音彙』をみて və6 とした。

これらを聲母で分類し、まとめたのが以下の表である。

NO.	73	146	24	39	100	138	78	108	166
「甌文」/ 直音字	p- 八	p'- 泡	b- 片	m- 媽	m- 蠻	f- 法	v- 萬	v- 飯	v- 飯
反切上字/ 字音	巴 puo	抛 p'ə	拔 bo	媽 muo	襪 mo	髮 fo	伐 və	伐 və	伐 və
推測音/ 本字	puo7 八	p'ə5 泡	bo2 片	muo1 媽	mo2 貓	fo7 法	və6 萬	və6 飯	və6 飯

NO.	22	43	46	47	89	29	51	114	135	132
「甌文」/ 直音字	t- 打	t- 打	t- 打	t- 打	t- 打	d- 彈	k- 趕	k- 稗	k- 稗	g- 卸
反切上字/ 字音	打 ta	打 ta	打 ta	打 ta	打 ta	踏 do	葛 kə	葛 kə	葛 kə	卸 go
推測音/ 本字	ta1 □	ta3 打	ta3 打	ta3 打	ta3 打	do6 □	kə3 趕	kə3 稗	kə5 幹	go2 □

ts 系聲母の場合は、韻母が他の聲母とは結びつかないことが重要であるが、ここに現れている ə や a などの韻母は他の聲母と結びつくことができる。同じ韻母であっても聲母が反切上字と同音になるかどうかで、韻母部分が表記されたりされなかったりするの表記として美しくない。『七音鐸』と『音彙』の中にもこのような文字の使い方を説明している箇所はないし、勿論このような韻母を省く文字自体も他の何処にも存在していない。このような状況から「甌諺略」にみられる聲母部分のみの表記は陳馴自身の発想によるものではないと考えたい。

以下、便宜上、現在でも使用されている注音字母を用いてこの発想について

説明してみたい。例えば子音 p を表す文字 ㄆ は po と発音して教える。同じことは「甌文」についてもいえる。ある聲母を表す「甌文」A が x という音を表す場合でも学習者は x だけでは発音できず、韻母の音 y をつけて x y と読んだはずで、これが反切上字の字音となる。ただ「甌諺略」の「甌文」の違う点は聲母部分の「甌文」A を x y と読むならば、x y という音節を書く場合でも A だけでよいと考えた点である。注音字母で言えば、「波」の字音 po を ㄆ と書かずに ㄆ とだけ書いてその音を表すようなものである。

実際にテキスト『七音鐸』を見てみると、第一課はいきなり聲母の文字学習から始まり、第八課では韻母を学習していないうちから、聲母の「甌文」を一通り読むように要求している。学習者が『七音鐸』をテキストとして用いたのならば、聲母だけでどのように読んだのであろうか。各聲母には説明上、反切上字（漢字）が付加されているが、やはりその字音で読んだのではないか。学習者が読み方をこのように理解したら、聲母部分だけでその反切上字の字音を表そうという発想が生まれてもおかしくない。ts 系聲母では韻母部分のない表記がすでに存在していたこともあり、このような発想は案外生まれやすかったのだと思う。

しかし、中には反切上字の聲母、韻母と同じであっても韻母部分が表記されているものもある。以下にその全てを記す。

(7) do2 ts'on1 (炙春) 交春炙香樟也

(11) mo4 ka5 (晚界) 夕時也

語中の do と mo はそれぞれの聲母を表す反切上字「踏」、「襪」と同じ韻母であるが、その韻母は表記され、正しい文字表記になっている。これらはどう解釈すればよいか。注目したいのは通し番号である。即ち、いずれも韻母の記載のない「甌文」が初出する以前に現れているのである。これは筆者が「甌諺略」を書いている途中で韻母部分の表記を意識的にやめたということを意味しているのではないだろうか。筆者は正しい表記法も知っていたが、途中から学習者の発想に合わせ韻母部分を表記しない方が理解しやすいと考えたのである。

4 『甌文音彙』と「甌諺略」の発音表記上の相違

同じ漢字があてられる場合でも、『音彙』と「甌諺略」で発音の表記が異なる場合がある。このような差異がみられるのはやはり「甌諺略」が『音彙』出

版後に別の筆者によって作成されたものであるためだと考えられる。そこには地域差、世代差以外に「甌諺略」の筆者が「甌文」を完全に理解していないために起こした誤りなども含まれていただろう。また、一見すると差異に見えるが、実際には話し言葉だけに存在する音で、『音彙』には収められていない場合も有り得ると思う。以下にその全てを記し、それぞれについて解釈を加える。各語は左から語釈、本字、相違のある字、発音の順で書いた。

(1) 晴也 紅天猛熱 「熱」『甌文音彙』nie8「甌諺略」nia8

「甌諺略」では「熱」の反切下字に「行」を用いている。「行」は『音彙』で25部iaに相当する字である。『音彙』では「熱」を7部ieに入れていることから、両者には差異があると言える。この相違は現代瑞安方言にも存在する。例えば瑞安(城関)ではnia8となるのに対し、現代瑞安(陶山)音ではnie8となる。

(6) 長庚也 黃昏曉 「黃」『甌文音彙』ho2「甌諺略」ho2

第一音節の「黃」に相当する部分に「咸」の音が当ててある。「咸」は『音彙』では第21部でho2となり、「黃」と同音にはならない。現代方言でも同音にはならないことを考えると、この語彙における個別的な変化があった可能性もある。温州ではhia2ɕylɕia3となり、「黃昏曉」と合う。

(7) 交春焚香樟也 炆春 「春」『甌文音彙』tɕ'ynl「甌諺略」ts'onl

「甌諺略」では「春」の反切下字に「洪」を用いている。「洪」は『音彙』で第4部onに相当する字である。『音彙』では「春」を23部ynに入れていることから、両者に差異があることがわかる。この相違は現代瑞安方言内部にも存在する。例えば瑞安(城関)ではts'onlとなるのに対し、現代瑞安(陶山)音ではtɕ'ynlとなる。

(17) 園中土一片也 一壘 「壘」『甌文音彙』luo4 「龍」『甌文音彙』luo4

『音彙』の26部(-uo)には「慣灣」などの牙喉音聲母に属する字だけが含まれている。現代瑞安音では『音彙』で10部(-io)に属する齒音聲母の字(条料など效開三四)も-uo韻に含まれるが(因みに蒼南蒲城では今日でも-ioである)、「壘」(通三鐘)はluo4となり、そこにはない。平陽や温州では「条料」と「壘龍」が同韻(-ie)になるが、「甌諺略」の「壘」はこのような地域の音なのかもしれない。

(60) 次等錢也 通順? 「閏」(韻母)『甌文音彙』-yn6「甌諺略」-ian6

「閏」は第二音節の反切下字に用いられている字で、『音彙』では第23部

(-yŋ) に属している。しかし「甌諺略」には 15 部 -iaŋ の「甌文」が使われていることから、「閩」に音の違いが存在したことになる。「閩」は現代瑞安方言で、例えば瑞安（城関）で hiaŋ となり、現代瑞安（陶山）音で hyŋ となる。

(66) 數目也 一「益」『甌文音彙』i7 「甌諺略」iai7, i7

「益」は数字の「一」の読みを表す字として用いられているが、「甌諺略」の中では二つの音が存在する。即ち、この iai と No.17,18 で使われている i である。これらはいずれも数字「一」の読みとして出ているので、「一」と「益」には二つの読み方があることになる。『音彙』には「一」の字音として iai7 と ia7 があり、「益」の字音として i7 がある。「一」の二つの音は方言差だと思う。現代語でみると、永嘉甌語には「益」と「一」に iai7 の音があり、この状況が「甌諺略」と一致する（『甌語』91 頁）。

(71) 數目也 六「六」『甌文音彙』lou8 「甌諺略」lu8

「甌諺略」では「六」の反切下字「斛」とその「甌文」が『音彙』では第 1 部 (-u) に属するので、「六」は lu8 となるが、『音彙』で「六」は第 11 部 (-əu) に所属しているので、lou8 となる。両者の差は第 1 部と第 11 部の密接な関係を表したものの。『音彙』から現代語に変化する過渡的な状態を反映したものであろう（拙稿（2007））。

(92) 小癰也 生癰兒「瘡」『甌文音彙』lai4 「甌諺略」luai2

「瘡」は『音彙』の中で第 19 部 (-ai) に所属しているので lai となるはずである。しかし「甌諺略」では「瘡」の反切下字に「回」が用いられており、この字音と「甌文」が共に『音彙』では第 20 部 (-uai) に属するので、「瘡」は luai となってしまう。現代甌語には luai という音はない。聲調にも相違が見られるが、不明。中古音では上聲であるので、「甌諺略」で「雷」の部分を読んだ可能性も考えられる。

(128) 不合也 不對「對」『甌文音彙』tai5 「甌諺略」tuai5

「對」は『音彙』では 19 部「哀」(-ai) に属すが、ここでは 20 部「隅」の音が当てである。(92) の「瘡」と同様である。

(131) 費事也 累堆「累堆」『甌文音彙』lail tai1 「甌諺略」luail tuail

温州 lai1 tai1 棘手；難以處理（『詞典』242 頁）。「累」「堆」共に『音彙』では 19 部「哀」(-ai) に属すが、ここでは 20 部「隅」の音が当てである。

(132) 滅也 滅□(gɔ1) 「滅」『甌文音彙』mie8 「甌諺略」mi1

「滅」は『音彙』で第 7 部に属し mie8 となるので、mi1 は温州音だろうか。瑞安では mie8 となる。第二音節の「甌文」は韻母の記載はなく、聲母が g で

あることが分かるだけである。音として「卸」が当てられているので go1 とした。

(139) 不穀也 不了得 「了」『甌文音彙』lio4 「甌諺略」luo4
「了」は『音彙』では 10 部 (-io) に属するが、ここでは 26 部「選」の音を当てている。方言差であろうか。

(146) 泡茶 p'o5 dzo2 「茶」『甌文音彙』dzia2 「甌諺略」dzo2
「茶」は『音彙』では第 13 部 (-ia) に属するが、官話音であろう。第 5 部には「茶」と同韻の「沙差」などが含まれることから、「茶」に dzo の音があったと推測する。現代瑞安音 dzo2。

(149) 請坐 ts'ej3 zo2 「請」『甌文音彙』ts'ej3 「甌諺略」ts'yŋ3
第一音節の「甌文」の音と反切が異なる例。「甌文」は第 27 部 (-ej) であるが、反切下字には『音彙』の 23 部 (-yŋ) に属する「允」が用いられている。「請」は『音彙』では 27 部に属し「甌文」の音と合う。

(157) 接帖 tsie7 t'uo7 「帖」『甌文音彙』t'io7 「甌諺略」t'uo7
「接帖」は『音彙』の例語として現れるが、意味は不明である (35 頁)。現代瑞安語では「接」と「掲」が同音になるので、「掲帖」(掲示する)の可能性もある。「帖」は『音彙』では第 10 部 (-io) に属するが、ここでは第 26 部 (-uo) の文字で表されている。現代瑞安では -uo となる。

(166) 請便飯 ts'ej3 bie6 vo6 「請」『甌文音彙』ts'ej 「甌諺略」ts'yŋ
第一音節の「甌文」の音と反切が異なる例。「甌文」は第 27 部 (-ej) であるが、反切下字には『音彙』の 23 部 (-yŋ) に属する「允」が使われている。「請」は『音彙』では 27 部に属し「甌文」の音と合う。

5 まとめ

本稿では「甌文」によって書かれた語彙集「甌諺略」について『音彙』との比較から述べた。今回の分析を通して「甌諺略」と『音彙』は同じ「甌文」で書かれているが、実際には両者の表記法や対応する字音に差異があり、そこから「甌諺略」の筆者が陳虬自身ではないことが明らかになった。

1903 年、陳虬は「甌文」を学習するための学校「甌文学堂」を創立するが、「甌諺略」の筆者はここでの教育に携わった門弟であると思う。直接、漢字の読めない学習者と接するうちに、より実用的な「甌文」による方言語彙集が必要であると感じるようになったのではないか。紙幅の関係で、全ての語彙を載せることができなかったが、今後はこれらの語彙について、さらに歴史的な分

析を試みたいと思う。

<参考文献>

- 陳虬（1903）『甌文音匯』（文字改革出版社（1958））
陳虬（1903）『新字甌文七音鐸』（文字改革出版社（1958））
村上之伸（2004）「『甌文音匯』研究」『音韻論叢』p.554-570. 齊魯書社
村上之伸（2007）「瑞安方言一百年間の音韻變化」『開篇』vol.26 好文出版
胡珠生（1992）『陳虬集—温州文史資料第八輯』浙江人民出版社
顏逸明（2000）『浙南甌語』華東師範大學出版社
游汝傑等（1998）『温州方言詞典』江蘇教育出版社
張永愷（2004）『瑞安方言讀音字典』上海社會科學院出版社
(流通経済大学)